

うみすずめ Vol.19

日本ウミスズメ類研究会 (Japan Alcid Society) 会報 1999年6月28日発行



Topics

『海鳥モニタリング体制の確立をめざして』

実行計画について

海鳥モニタリング&センサス

フィールドの便利グッズ(1) / ソニーICD-55

フィールド短信 / 釧路航路でのエトピリカ

会員紹介 / 藤田裕之さん

『海鳥モニタリング体制の確立をめざして』 実行計画について

日本ウミスズメ類研究会

昨年より議論している海鳥モニタリング体制の確立ですが、みなさんに「3月末までに行動計画を作成する」といっておきながら、実際にはなかなか具体計画を立案するまでには至っていません。

各項目について、それぞれ担当者にとりまとめてもらいましたが、ここではいわゆる5W1H（いつ、どこで、だれが、...）がかけてしまっています。

モデル地域を設けて地域ごとに実行計画を策定するなどの工夫をしないと、いきなり全国レベルで考えるのは難しいような印象を持ちました。

まず、担当者がとりまとめたものを示します（表現の一部を事務局で改めました）。みなさんからどのようなご意見が寄せられたのかも、この号の付資料としてつけました。

さらに、北海道天売島での具体的な実行計画案をご紹介します。これは、北海道が実施した海鳥関係者の会議の延長で作られたものです。

1. とりまとめ結果

調査地について

とりまとめ責任者： John Fries

どの調査地にしろ、資金、人材、時間の問題がついてまわる。それが情報の少ないアクセスの悪い調査地であればあるほど、調査の必要性も増し、上記の問題も大きくなる。加えて危険管理の問題も生じる。

現時点で把握している部分を明確にし、長期的な調査計画をたてる。資金さえあれば時間と人材の確保がつくというのが、多くの会員の本音であるため、資金調達法を考えながら、調査地と調査内容項目に（海鳥相把握のための）優先順位を決定し、調査地を絞り込む。地元や国（水産庁、環境庁、海上自衛隊）、自治体、各種国内外研究機関や多国間条約を利用、物理的な援助（施設利用、情報共有、人材利用）を求める。

アクセスの悪い調査地については、航空写真、人口衛星画像の利用、気象データの活用、泊まり込みのできる施設の開設をめざす。調査中の保障、保険など危険管理については、資金調達とその場所をよく知る人の協力を得る。

野鳥の会など、会員に誘えそうな機関にはたらきかけるなどして、会員を増やし、実質的な資金をふやす。助成金獲得や、国や自治体への資金援助を頼むために、報告書を提出するなど研究会をアピールすると共に調査体制を確保する。具体的な一歩として、現時点で把握している部分を明確にし、調査地リストを作成、インベントリーにアクセス法（経費含む）も加える。調査地と調査項目の優先順位を決め、担当者（事務局、研究者、地元協力者、一般など）の振り分けをおこなう。

資金について

とりまとめ責任者： 綿貫 豊

何もないところに資金がないのはどんな事業研究でも当然であり、予算がないのは明らかな事実で、今さら言っても仕方がない。様々な方法で、我々が調達する以外道はない。調達方法、その運営、および継続性は以下のとおりである。

助成金（受託調査も含む）を確保する。その場合、国、地方自治体、民間企業へ申請あるいは働きかけることが可能である。国ならば、環境庁の国勢調査に盛り込んでもらう、水産庁にお金を出してもらう、文部省に研究助成を申請する、漁協から資源調査費として出してもらう、自治体に予算を組んでもらうなどであるが、場合によっては、政治家にお願いして調査の必要性を認識してもらい、獲得するようにすればよいだろう。民間企業の場合は、ただ助成金を申請するのではなく、キャンペーンやCMに海鳥あるいは海をからめてもらうように働きかける、海鳥や鯨ウオッチングのツアーとタイアップ、なども考えられる。これらの資金や寄付をもとに基金を作るのも一つの考えであろう。アースウォッチの調査ボランティアみたいに、参加者がお金を払って調査に参加するシステムをつくるという手もある。

短期的目標とおもわれる海鳥繁殖地インベントリー作成のために必要なお金にだけなら、やる気のある組織と計画さえあれば少なくとも連絡費と印刷費程度は取ってこられると思う。交通費だけ出る方向で検討することも可能である。長期的目標である継続調査は、インベントリーの存在そのものが、資金調達の素材となるでしょう。継続して実施するためには国や地方行政から継続事業として受託する必要がある。各種助成金は短期間で終わる調査には向いているが、長期的なモニタリングを保証するものではない。ただし、緊急を要する場合の情報の公開や研究活動を妨げないことは条件としておいたほうがよい。どこかの海域で重油事故などが発生した場合、報告書がでるまで情報を出せないのであれば本末転倒である。場合によってはボランティア体制で望むことも念頭におく必要がある。資金調達は専任者がいた方が効果的で、担当者の生活を補償するくらいのことは考えたほうがよい。

いずれにせよ、調査の必要性、調査の実施、その結果をアピールし、更に来年の計画をPRする必要がある。お金をもらうためには、データを公表して何かの役に立てることが必要である。企業、省庁だけでなく、一般の人からも予算を集めるなら、“お金を払ってもよい”と彼らに思わせるようにアピールしなければならない。特に、地域住民の理解が不可欠であり、啓蒙も含めて、地元の人たちへの知識の還元をおこなう。世論を高めるため、良い意味でのマスコミ受けを狙うことも大事である。

プランニングについて

とりまとめ責任者： 福田佳弘

問題点

目的がはっきりしていなく基本方針がない、特定の少数の人が行っており、どこで誰がやっているのか解らない。海鳥を巡る問題について検討が必要である。

プラン

今、現在の段階では国や公共機関が永続的に調査を行うということは難しい（水産庁では混獲については行っている）。しかし、海鳥を巡る状況は厳しく絶滅が危惧される種や情報の乏しい

種が存在している。ただ海鳥を保護するというだけでなく、沿岸の自然環境の把握と保全という自然保護につながるような活動が望ましい。また、海鳥の重要性について接得力のある理論武装も必要である。そこで、日本ウミスズメ類研究会が基本方針を作成し主催者となり活動する。当面の目標としては、情報の整理とデータの整理が必要である。何処で誰がどのような調査を行いどのようなデータを持っているのか整理し、重点調査地区の選別や絶滅危惧種や情報不足種の中から重要種の選別を行い調査する。その結果を持って国や行政機関に訴えて行く。海鳥調査者の育成と調査結果の充実を図るためにマニュアル作成や研修会の開催も行う。

人材について

とりまとめ責任者： 長 雄一

海鳥モニタリングを継続的に行う上で調査員の確保が必要である。

そのためには、調査可能な人材を計画的に集めるか、養成する必要がある。さらには、モニタリング結果を踏まえ将来的な調査保護活動を主導する人材が必要となる。

まずは、大学、山階鳥類研究所、野鳥の会、日本鳥類保護連盟、WWF Jと協力関係を構築すべく連絡を取り合い、海鳥類調査が可能な人材の発掘、前述機関との共同講習会を企画する。かつ、調査方法をなるべく簡略化し、誰にでも調査可能な詳しいモニタリングマニュアルを作成する。まずは調査目的の明確化（これがないと調査の必要性及び継続性が著しく低下する）及びしっかりとした調査体制の構築を最優先し（手弁当でも可能なセンサス中心から始める）、人的体制が強固となってから調査項目の拡充を検討する。

マニュアルについて

とりまとめ責任者： 長 雄一

海鳥モニタリングを行う上で、各地域で調査方法に差があると、結果の比較が困難になる。また、不特定多数が参加する場合にはマニュアルは不可欠である。

そのため、マニュアルを作成することが先決であるが、すべての調査項目を決定するのではなく、最低限必要な調査項目を記載し、広く公開すべきである。調査マニュアルの基礎としては北海道大学の綿貫氏の天売島モニタリングマニュアルを基本とするが、最初から繁殖地の立ち入りを前提とした調査は、海鳥繁殖保護（繁殖地への立ち入りには、必ず攪乱を伴うことを忘れてはいけない）や費用の面で不可能であることから、繁殖地の位置の特定あるいは飛来数（繁殖数ではない）の観察に留めるのが順当であろう。ただし、地域ごとに実情をふまえて地域版サブマニュアルを作成する。

普及について

とりまとめ責任者： 長 雄一

海鳥類は陸鳥に比べ、その現状が一般の人々に知られていない。このため、人材あるいは資金を集めるために普及活動が重要となる。

普及活動に有効な手段としてはフォーラムの開催、マスコミへの情報提供が考えられる。フォーラムに関しては、海鳥モニタリングに関わる人間の交流ともなり、モニタリング結果の積極的提示によりN G O主導での問題提起の場として期待できる。

まずは、広範囲で調査結果を収集し、海鳥類へ関わる問題を整理して提起することが、行政か

ら予算をとって行く場合に不可欠である。このため、普及活動を通じて世論形成を促進するのはもちろんであるが、それに加え各行政機関との信頼関係を構築して行くのが理想と考える。

データについて

とりまとめ責任者： 林 英子

【問題点】

データについては、「何のために」「どのような」データが必要なのかあまり明確には示されていない。(データの目的)

広く情報提供・データ収集を呼びかけるにしても、データの質にばらつきが出てしまう。(データの質)

そして、得られたデータの公開にあたっては、どこまでどんなデータを公開するのかのガイドラインがなく、提供する側にも不安がある。(データの公開)

【長期的方向付け】

一般から集める基本的な、統一したデータの収集システムと、モデル地域を決めてモニタリングするシステム(マニュアル作成も含まれる)ができるようにする。

【短期目標】

1999年度～2000年度

～日本における海鳥の生息状況のレビューおよび問題点の把握と問題解決に向けて～

何のためにどのようなデータが必要なのかを明確にした上で、どのようなデータがあるのか、情報収集する。情報収集の対象はこの段階では公開されているもの(論文や行政の報告書など)、前提条件に合意してくれるメンバーなどから集めたものなどが考えられる。そして前提条件に対してどのような問題点があるかを明らかにし、それを誰がみてもわかるように報告書としてまとめ、発表する(できるか?)。ただし、発表する内容や、対象(一般公開か否か)はこれから検討を要する。

2. 実行計画の一例

天売島海鳥保護実行計画案

北海道希少海鳥類保護増殖部会

天売島ワーキンググループ

綿貫 豊(北海道大学農学部)

寺沢孝毅((有)ネイチャーライヴ)

小野宏治(北海道海鳥センター)

はじめに

天売島の海鳥保護計画にあたっては、海鳥群集の多様性を守ることを第一とし、その枠の中で希少鳥類の保護・増殖につながる計画を実行していくものとする。ウミガラスとウミスズメは、レッドリストで絶滅危惧IA類に指定され、国内では天売島が唯一の繁殖地となっている。また、ケイマフリは絶滅危惧II類に指定され、種の分布範囲も狭いことから、前2種と並んで緊急な保護計画が必要である。

保護実行計画では、(1)希少海鳥類3種の保護実行計画、(2)他5種の繁殖海鳥のセンサス計画、(3)群集保全のための実行計画、(4)観光ガイドライン作成計画、(5)マニュアルおよびデータベース作成計画、にわけて説明する。

つぎに、これらを実行するための事業計画について説明する。

A. 保護実行計画

(1) 希少海鳥類の保護計画

ウミガラス

・モニタリングカメラの設置

ウミガラスは島の崖の部分に営巣するため、島の陸部分からでは繁殖確認ができない。そのため、これまでボートによる調査をおこなってきたが、この方法では

- ・コストがかかる(頻繁にボートを出す必要がある)
- ・天候によりボートを出せず、観察できないときがある
- ・ウミガラスの繁殖に影響を与える恐れがある(観察による妨害)

などの問題点がある。

ウミガラスの繁殖状況を的確に把握し、保護対策につなげていくため、今後は小型CCDによるウミガラスカメラの設置が必要である。

【設置場所】

カメラは、現在繁殖が確認されている赤岩対岸の岩のくぼみ内、および屏風岩に設置してその対岸部分をとらえる角度にとりつける。

【保守】

バッテリーを地上部に設け、容易に交換できるようにする。カメラは、後述するデコイのメンテナンス時に、あわせて整備する。

【設置手段】

NTT移動通信網など高度な技術を持つ企業と提携し、電波により数秒ごとのリアルタイム映像を電送する。

【利用方法】

電波は、天売島の海鳥研究の中核基地である北海道海鳥センターで受信し、ビデオテープに記録して繁殖行動を記録するとともに、映像ホールとインターネットに常時流して、普及啓発活動に役立てる。

・デコイの設置

平成8年度までに、天売島には合計91基のデコイが設置された。

デコイによる希少鳥類の誘因成功例としては、鳥島のアホウドリやEastern Egg Rockのニシツノメドリがあげられる。

天売島での成果には疑問視する声も多いが、減少要因が多数挙げられる中でわずかながらも現在も繁殖が続いていることは、デコイの誘因効果とみてよいだろう。

今後もデコイを定期的にメンテナンスし現状を維持するとともに、さらに誘因効果を高めるため、他地域の成功事例を十分に解析した上での新しい作戦が求められる。

・センサス

飛来羽数などを把握するため、前述のカメラ設置と合わせて必要最小限のボートによる調査が必要である。

時期は飛来羽数が最大となる6月下旬から7月中旬で、調査者と記録者、および操船者3名による最低のべ5日の調査をおこなう。

ケイマフリ

天売島での繁殖現状はあまり明らかではないことから、海上センサスと巣のセンサスにより個体数の推定をおこなうことが急がれる。

- ・海上センサス（略）
- ・巣のセンサス（略）
- ・陸からのカウント（略）

ウミスズメ（略）

(2) 他5種の繁殖海鳥のセンサス計画（略）

(3) 群集保全のための実行計画

- 3-1. 捕食者の調査（略）
- 3-2. 捕食者のコントロール（略）
- 3-3. ら網調査（略）
- 3-4. ゴミ処理調査（略）
- 3-5. 標識調査（略）

(4) 観光ガイドライン作成計画

観光による影響は少なからず懸念されるため、エコ・ツーリズムの概念に基づいたガイドライン作りが求められる。

天売島では現在、旅館や民宿の主人が観光客を率いて「ウトウを見せる」ツアーをおこなっている。しかし、将来的には、フィリッ島のペンギンパレードなどのように、レンジャー主導のもとに海鳥や海鳥をとりまく生態系について理解を含めてもらうエコツアーがなされるべきである。

地元ではすでに天売・焼尻エコツアー推進協議会が発足していることから、この部分についてはこの推進協議会が主体となって協議をすすめるものとするが、決定事項についてはガイドラインを作成し、文書として共通の認識のもとに置くことが望ましい。

(5) マニュアルおよびデータベース作成計画

調査方法やそのデータを広く一般のものとするためには、共通のマニュアルを持つことと、データベースとしての公開が必要である。

マニュアルは、

- ・繁殖地での各種海鳥のセンサスマニュアル
- ・船（ボート）による各種海鳥のセンサスマニュアル
- ・船（フェリー）によるセンサスマニュアル

を作成、印刷し、公開後に随時改訂していく。

データベースは、公開の程度や利用方法についてガイドラインを定め、広く公開していった方がいいデータは、インターネット等による公開手段も検討する。

B. 事業計画

《組織》

上記に述べたような調査を実行していくためには、しっかりとした組織基盤と協力体制が必要である。

既存の組織、および個人より、天売島海鳥群集保全連絡協議会を設置することが望ましく、連絡体制を密にするため、年2回程度の協議会を開催する。

協議会の構成者としては、

- 北海道海鳥センター（事務局）
- 北海道大学農学部
- ・北海道大学水産学部
- ・環境庁西北海道地区国立公園・野生生物事務所
- ・北海道庁
- ・羽幌町農政課
- ・羽幌町観光課
- ・羽幌町漁協
- ・羽幌町観光協会
- 天売島海鳥保護対策委員会
- ・北海道環境科学研究センター

等があげられる（はこの協議会でのコアメンバー）。

また、事業計画を実行するため、つぎのような小部会を協議会内部に設置し、必要に応じて随時、部会を開催する。部会はコアメンバーと、表記した構成者より構成する。

- ・海鳥調査部会
コアメンバーより構成
- ・エコツーリズム部会
天売・焼尻エコツー推進協議会が担当し、天売島海鳥群集保全連絡協議会に報告

《調査主体》

さまざまな調査を実行するには、調査主体を明確に定めるとともに、調査ボランティアについても適切に位置づける必要がある。

これまで天売島でおこなわれてきた調査を振り返ると、ウミウ、ヒメウ、オオセグロカモメ、ウミネコ、ウトウの各種センサスとモニタリングについては綿貫を中心とする北海道大学農学部のチームがおこなってきた。ウミガラスについては、羽幌町委託により寺沢（有）ネイチャーライヴ）を軸に調査してきた。捕食者のインパクトについては、天売島海鳥保護対策委員会や北海道庁を主体に実施してきた。

天売島の海鳥研究では、1997年、中核施設として北海道海鳥センターが環境庁と羽幌町により設置されたが、実際の調査はこれまでの調査主体との連携なしには考えられない。

北海道海鳥センター自体、環境庁の委託を受けて羽幌町が運営していることから、この実行計画案の調査主体とはなりにくい側面がある。

したがって、天売島海鳥群集保全連絡協議会をNPOとして組織し、NPO法人法により法人格を取得し、委託調査で各種調査や検討会を実施していくことが望ましい。

実際の調査には多くの人手を必要とするが、今後は調査アシスタント、およびボランティアの役割についても明確に位置づけなければならない。

海外でのこのような調査では、調査アシスタントについては給料と生活費（食費、現地までの交通費など）、宿泊施設、および必要な装備の提供をおこなっている場合が多い。

また、調査ボランティアに対しては、給料以外のすべてを提供する場合が多く、日本のボランティアに対する考え方とは大きく隔たりがある。

ボランティア参加者と調査主体者とは、相互関係で成り立つものであり、けっして一方的な負担を強いてはならない。ここでは、ボランティアは「海鳥調査に対する貴重な経験と学識を得る」ことが目的であるし、調査主体者にとっては「海鳥調査者の補助をしてもらう」ことが目的である。したがって、海外の多くの事例のように、ある程度技術を持った人に対しては調

査アシスタントとして臨時雇用をし、ボランティアに対しては給料以外のすべて（生活費、宿泊施設および必要な装備）の提供をおこなうべきである。

天売島では、環境庁が設置した国定公園の管理棟があるが、当面はこの管理棟を宿泊施設として利用し、調査者の便宜を図るほか、文献の整備など調査拠点としても活用すべきである。将来的には、専用宿舎を建設し、島でインタープリテーション活動をおこなう海鳥レンジャーの拠点にもなりうるよう、展開していくことが必要である。

《費用》

天売島海鳥群集保全連絡協議会の運営にあたっては、調査費を含め多くの費用が必要となる。

しかし、いままで海鳥群集保全に関して個別に費やしてきたさまざまな委託金をこの協議会に一本化すれば、けっして運営は難しいわけではない。

また、協議会としては委託金だけに頼らず、さまざまな助成金を確保するなどの工夫が必要である。

《提言書》

協議会は、毎年の進捗状況について、年度末に報告書を作成し、関係各機関に配ることが望ましい。

提言書の実効性を高めるためには、協議会に参加する各機関の提言後の行動が大切であり、各機関は提言に添った次年度の行動計画を立案し、協議会に報告すべきである。

《事業の公開》

事業計画や事業の結果、および事業にかかる費用等は、その透明性を保つために極力公開するものとし、インターネットのホームページに随時掲載していくことが望まれる。さらに、メーリングリストや公開掲示板などにより、多くの人と議論をし、天売島の海鳥群集保全が日本における自然環境保全のモデルケースとなるよう、事業をすすめて行くべきである。

実行計画スケジュール

初年度（1999年度）

《すでに調査が決まっているもの》

・ ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメのセンサス

（本文略）

《調査の必要性・緊急性が強いもの》

・ ウミガラスの追加調査

（本文略）

・ ウミウ、ヒメウ、ウミネコ、オオセグロカモメのセンサス

（本文略）

・ ノネコ生息実態調査

（本文略）

これらの調査については、既述の「実行計画案」に添った内容でデータをとるものとする。委託費については適切に管理されるよう、その調査結果の生データや委託者の受領書類等についても委託者が監督すべきである。

次年度以降の活動に向けては、今年度中に環境庁あるいは北海道庁が呼びかける形で、天売

島海鳥群集保全連絡協議会準備委員会を発足させる（設立のための会議費についても見込む必要あり）。

実行計画を机上のもので終わらせないために、積極的に協議会の発足（およびNPO法人化）をすすめる必要がある。

海鳥モニタリング体制の確立を一日も早く実現するため、研究会では今年の日本鳥学会大会（東京で開催）の自由集会において、今回は**具体的な実行計画立案**に向けたワークショップを開きたいと考えています。

海鳥モニタリング&センサス

その後の「マダラウミスズメ」

マダラウミスズメ調査チーム：福田佳弘

日本で最も謎めいた鳥の1種である「マダラウミスズメ」。

ウミスズメ類のほとんどが沿岸の海岸の岩礁や岩棚などの地形を利用するのに対し、このマダラウミスズメは主に内陸の森林の樹上に営巣するという変わり者である。

この変わり者のウミスズメは、アメリカとカナダの北米大陸そして極東ロシアで繁殖が確認されている。わが国での繁殖の記録は1961年オホーツク海側小清水町の藻琴山中で抱卵中の雌が捕獲された。それ以来この鳥の繁殖記録は全くない。

この鳥の謎を少しでも解き明かし保護への一歩としようとして1996年7月に研究会が（財）日本自然保護協会より助成をいただき、キム・ネルソンとトム・ヘイマーのアメリカ人研究者と、羽幌で開かれた海鳥ミーティングに招待された海鳥研究者アンソニー・ガストン、ローラ・レシュナーがそれに加わり、知床半島を中心に調査を行った。

残念ながらマダラウミスズメを確認する事が出来ず、アメリカ人研究者に調査の方法を学ぶのみとなってしまった。

その後、私に偶然斜里町から海鳥調査の依頼があり1997年と1998年に調査を行った。この鳥についても重要種として特別に調査し、もちろんアメリカ人研究者から学んだ事も生かし調査した。その結果、知床半島中央部のルシャ湾周辺の海域で主に観察することが出来た。特に、7月中旬から8月中旬において（育雛期から巣立ち期）に頻りに観察された。巣立ちした幼鳥と思われる個体やツガイ行動（クチバシ上げ泳ぎと同じ潜水）などの行動を観察することが出来た。

これは、知床のどこかで繁殖しているのではという期待が出てきた。

今年は、WWF Jの助成を受けてこの変わり者の調査します。今年はより繁殖を裏付けるデータが取れるよう努力したいと考えています。

今後も成果があれば研究会の会報にて報告します。

ユルリ・モユルリ島のモニタリングについて

長 雄一（北海道環境科学研究センター）

ユルリ・モユルリ島は北海道東部（北海道人は道東と略します）の根室市太平洋岸にある無人島です。道東はカムチャッカ半島・千島列島・歯舞諸島といったオホーツク海・北太平洋に列をなす群島の南のはずれ部分にあり、エトピリカ等の繁殖地南限（場所としてはユルリより南の厚岸町大黒島）となっています。また、今は天売島にしか繁殖が確認されていないウミガラスも過去にユルリ・モユルリ島で繁殖していました。夏になると毎日のように海岸線は濃霧に包まれますが、この天然のベールが海鳥類の繁殖地を守ってきたのではないかと根拠もなく考えてしまうぐらい、北海道の中でも日本というよりは「カムチャッカ・アリューシャンに続く北方域の入り口」といった環境です。

しかしながら、つい最近まで道東の海鳥類については、その生息数もはっきりとは分からない（あるいは情報が外に出ない）という状況でした。このため、1995年及び1996年に北海道の環境行政部門は、その地域の主要海鳥類（繁殖している種中心）についての生息数調査を行いました。道東の太平洋岸については、6月あるいは7月に実施した船上カウントあるいは繁殖地上での歩行カウントにより、大まかですが生息数を把握しました。ウミスズメ科ではエトピリカ生息数は30個体未満、ケイマフリも100個体未満の確認数しかありませんでした。その一方でウトウ繁殖数は1万つがい以上と推定（巣穴密度等から推定）されました。

1996年からは環境庁による「北海道希少海鳥類保護増殖事業」がスタートしました。私はその一環として1997年夏からユルリ島を中心にエトピリカの繁殖数の推定と行動観察を、根室市に住む青木氏といっしょに行ってきました。観察時間が積み重なるにつれ、新しい巣穴が見つかるようになりました。しかしながら、食性や巣立ち率あるいは繁殖に影響する要因等については不明な部分が多く、「モニタリング」の域にはまだまだ達していません。さらに調査員が巣穴に近づきすぎると、餌を持った個体が巣穴に入らないといった悪影響もあります。このため、細心の注意（影響があると判断したら調査を中止する）で調査を行う必要があり、小型ビデオカメラの使用といった調査技術の革新も必要と考えます。

何はともあれ、北海道は海鳥の楽園であると、本州以南（北海道弁では内地といいます）の人に誇れるように、いろいろな立場の人が知恵を出し合っていかなければならない時期に来ていると感じています。本来、道東はもっとウミスズメ類（チシマウガラスとかゼニガタアザラシ・ラッコとかも）が住んでいても良い自然環境と思えるので・・・



うみすずめのひろば



フィールドの便利グッズ(1)



野外で鳥を見ている時、「ノートはつけたいけど、その場では時間がない」と思う人も多いのではないのでしょうか。とくに、船の上から鳥を記録するような調査では、ノートも書きにくいものですし、記録している間にも船はどんどん進んでしまいます。

以前からよく使われていたのは、マイクロテープのレコーダーでした。しかし、これも時間が記録されないので、独自に工夫する必要があります。たとえば、一定時間ごとに音を鳴らしたり、時計を見て自分で読み上げたりする必要がありました。これは面倒なものです。

そこで、今回御紹介するのは、声とともに時間も記録され、しかも記録の一つ一つを区切ることができるICレコーダーです。

留守番電話でも採用されているICレコーダーは、以前は録音時間も短く、ほんとうにメモ程度の使用しかできませんでした。しかし、最近出ているものはまさにフィールドでの使用に適しています。

私が使用しているのは、ソニー製のICD-55という製品です。写真はほぼ実物大、手のひらにすっぽりとおさまるハンディさです。

録音時間は、高音質モードで32分、長時間モードで64分もあります。ひとつの記録はせいぜい10秒程度ですから、これだけあればまず十分です。

録音データは、ひとつひとつのファイルに区切ることができます。ファイルはA, B, Cの三種のフォルダにわけて別々に記録することもできます。大事な記録には重要マークがつけられます。Aフォルダには鳥の記録、Bフォルダには植物の記録、などと使い分けることもできるでしょう。それぞれのフォルダには最大で99件まで記録可能です。これはやや少なめに感じました。

実際の船からのセンサスに使ってみたところ、たくさん鳥の出る航路で2時間から3時間くらいはいけました。長時間の調査では2つくらい持ち歩くといいでしょう。

録音は電池を交換しても消えることがなく、また、その場で再生して確認できるのも特徴の一つです。

一方、あまり遠くの音は拾ってくれませんので、会議などの録音には不向きです。また、外部マイクをつけることもできません。

このレコーダーは、野外観察会のときにも使えます。あらかじめ、観察会で見られそうな鳥の声を録音しておくのです。パソコンのスピーカーから直取りした音でも、そこそこきれいに再生されました。ICですから、ファイル番号さえ覚えておけば、目的の鳥の声は一発です。ただ、人間の声の音域にマイク特性をあわせてあるのか、たとえばコマドリやヒガラなど高音域の声の鳥では音が記録されない問題もありました。うまくいったのは、ウトウやウミネコ、アリスイなどです。

気になるお値段ですが、定価で17000円。各社から似たような製品が出されつつあり、値段も性能によってピンからキリまでありますので、利用形態にあわせてぜひ検討してみてください。

(小野宏治、北海道海鳥センター)

この原稿を書いた後に、オリンパス光学より、Voice-Trek DS-150という製品が発売されました。標準モードで75分の録音が可能だそうです。

以下、ホームページ (www.olympus.co.jp) からの情報を引用します。詳しいことはオリンパス光学 (株)、Tel.0426-42-7499までお問い合わせ下さい。

Voice-Trek DS-150は、高い総合周波数特性と高圧縮を両立させた音声ファイル保存規格の採用により、最大160分の高音質デジタル録音が可能です。電池を含んで74g・厚さ14.5mmの超薄型小型軽量デザインにすることで、高音質なICレコーダーの世界をより一層身近にしました。

Voice-Trek DS-150は、洗練された薄型デザインの中に、VCVA録音機能や早聞き再生、フルオートオフ機能など使いやすい機能に加え、マイク端子も搭載しております。録音された音声は高音質のまま高圧縮されたデジタルデータ (DSS規格ファイル) に変換され、内蔵のフラッシュメモリに記録されます。記録時間は標準モードで約75分、長時間モードで約160分の録音が可能です。また、デジタル録音のため、DS-150本体で上書き・挿入・削除などの編集や、聞きたい音声ファイルへの高速アクセスも、簡単なボタン操作で瞬時に行えます。

メモリに記録された音声ファイルは、別売のPC接続キット (AS41) を使って、パーソナルコンピュータ (以後PC) に転送し、PC上での管理・保管や、PCのサウンド機能での再生、電子メールへ添付して送付することなどが出来ます。また、PC上で簡単にWindowsの標準的なサウンド形式であるWAVE (ウェーブ) ファイルに変換することも可能です。その上、日本IBM株式会社のViaVoice98や、株式会社ジャストシステムのVoice-太郎9との組合せで、録音した音声ファイルから音声認識による文字変換も可能です。

製品名	メーカー希望小売価格 (税別)	発売日
Voice-Trek DS-150	25,000円	6月10日
PC接続キット*AS41	7,000円	7月10日

(PC接続キットには データ転送用専用ケーブルと音声再生ソフト (DSS Player 3) が含まれています。)

フィールド短信

釧路航路でのエトピリカの記録



エトピリカの撮影日時は1998年7月12日 (日) 12時釧路港発で十勝港17時着の途中だったので14時ごろだったと思われます。20ノット (約時速40 km) のスピードの船の上からの撮影だったのでピンボケになっていますが、他にも2~3枚の個体の写真が撮れましたので幾つか数があったと考えられます。私はウトウだと思って撮影していたのですが、赤い嘴のがいたので現像してからの楽しみにしていました。(木村 宏さん、東久留米市)

《編注》

嘴が比較的大きいこと（ウミオウムとは異なる）

目の後方上部が白く、羽衣がエトピリカの幼鳥に最も近いこと

などから、「エトピリカの幼鳥」ではないかと思われま

す。Gaston & Jones (1998) による "The Auks" という本のイラストを見ると、この写真に非常に良く似た絵を見いだすことができます。

会員紹介(1) / 藤田裕之さん



研究会会員のみなさんのなかには、エトピリカファンの方もかなり多いのではないのでしょうか？

「派手な嘴をしたその容姿は、シブヤの街を闊歩する若いねーちゃんをイメージさせる」（某会員）という発言も聞かれるほど、特徴のある鳥です。

昨年、道東で民宿えとぴりか村を営む片岡義廣さんは、長年の観察記録をもとに北海道新聞社より『エトピリカ』を出版されました。

ぜひ、読んでいただきたい1冊ですが、この本のなかに使われている写真も見事です。

会員紹介の第1回目に登場してもらうのは、エトピリカの写真を撮られた藤田裕之さんです。

1962年生まれ。大学4年の頃から北海道にはまり、そのうちバードウォッチングに目覚める。北海道を旅するために大学院へ行く。ただし専門は電気工学。1986年キリタップに行き、はじめてエトピリカを見る。それから数年間、夏休みにキリタップでエトピリカの観察・撮影をする。

1990年にAtlantic Puffinを見たくてUKに行く。

LondonのScotland観光局でShetlandへ行けば確実に見られることがわかり、夜行バス・夜行フェリーを乗り継いでShetlandのMain Islandに着く。観光案内所で一番北の島UNSTがよかろうとめぼしをつけ、セスナで渡る。そこで5日間滞在し、オオトウゾクカモメにいじめられながらもPuffinを堪能する。

キリタップの「えとぴりか村」の片岡さんに、「一番行きたいところはどこですか」と尋ねたところ「アラスカのPribilof島」と回答があった。数年後の1996年、Pribilofに8日間滞在し、Tufted Puffinをはじめウミスズメ類を堪能する。

Pribilofに滞在中アラスカのカメラマンが南極のスライドを上映してくれる。ペンギンはウミスズメの親戚だと思い込み、1998年末南極ツアーに参加する。ペンギンはもちろん良かったが、荒れ狂うドレーク海峡で飛び交うアホドリ類に感動する。

藤田さんのホームページは、<http://www.jps.net/fujitah>です。

ウミスズメ研の近況報告

「あれっ、最近、研究会から何も届かないなあ。会費滞納でとめられているのかなあ...」とお悩みの皆さん。会報発行が大幅に遅れてごめんなさい！

今年に入ってからというもの、公私ともに非常に忙しく、あちこちに謝りまくる日々が続いています。昨年末の鳥学会で幹事会を開き、幹事の役割分担についても決まってはいるのですが、まだ少ししか引き継ぎできず、悪循環になっています。

ちなみに、現在の会の体制について記すと...

代表 綿貫 豊 (北海道大学農学部助教授)
会計 中村 豊
監査 武石全慈
樋口行雄
会報 福田佳弘
ホームページ・メーリングリスト 藤岡エリ子
広報 新庄仁美
海外 ジョン・フリーズ
事務局 小野宏治

というようになっています。

将来的には、地区ごとのコーディネーターも配置していく考えです。

さて、研究会では昨年11月にみなさんにアンケートをお配りしました。内容に一部不適切な箇所もあり、ご迷惑をおかけしましたが、30通あまりのご意見を頂戴することができました。

寄せられたご意見を、すべてデータベース化するとともに、とりまとめ担当者に送付し、今回掲載したようなアクションプランを作ってみました。

「誰が、いつ、どのように」という具体的な項目についてこれからさらに検討し、2000年にはそれを着実に実行していけるようにしたいものです。

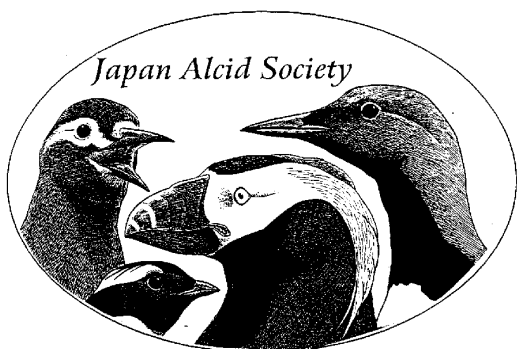
研究会が運用するメーリングリストも、ウェブマスターの藤岡さんらのご尽力により、さまざまな意見が交わされています。入会登録時にメールアドレスをご記入いただいた方にはご案内しましたが、まだ未加入の方は Majordomo@ml.asahi-net.or.jp 宛に

subscribe j-seabird あなたのメールアドレス

だけを本文に書いてメールを送ってください。

もしうまく登録できないときには、j-seabird@marine.email.ne.jp まで登録希望のメールを送ってください。

今後ともよろしくご支援のほど。



日本ウミスズメ類研究会

事務局 〒078-4116
北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目
北海道海鳥センター
ph: 01646-9-2080 fax: 9-2090
E-Mail: kojiono@gol.com
URL <http://www2.gol.com/users/kojiono/>
郵便振替 00170-1-580492 (口座名 日本ウミスズメ類研究会)
02720-9-12926 (口座名 海鳥研究・保護基金)
